



警告のニューズレター「角笛」

発行日:2015年3月発行(第59号)

発行:警告の角笛出版

価格:100円(送料込みで200円)

角笛HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

【目次】

◎巻頭メッセージ:『主よ、主よ。』と言う者 エレミヤ

◎証:安息日

◎お知らせコーナー:「新刊本の紹介」「日曜礼拝のご案内」「第39回黙示録セミナー」

【巻頭メッセージ】

『主よ、主よ。』と言う者

by エレミヤ

今回は、『主よ、主よ。』と言う者として、このことをメッセージしたいと思います。テキストは、以下の箇所です。

【聖書箇所】マタイの福音書7:21-23

7:21 わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。

7:22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』

7:23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども、わたしから離れて行け。』

この箇所はある意味驚くべき聖書箇所です。キリストの名によって預言をしたり、悪霊を追い出したり、また奇蹟を行う人とは、大変信仰のあるクリスチャンたちを指すと思えます。そのような人々でさえ、その日、キリストにより、『わたしはあなたがたを全然知らない。私から離れて行け』と言われてしまうのです。それなら一体、

そんな奇蹟を行うことのできない私は一体どうなるのだろうか？そんな不安が湧き出る箇所です。一体ここで叱責されている人々の問題とは何か？どうすれば我々も同じ過ちに入らないで済むのか？をよく考えてみたいと思うのです。

<大きな勘違い>

この箇所から分かることはこのことです。ここで、『主よ、主よ。』と言っている人々は皆、夢にもその日、自分がキリストから拒絶されるとは思ってもいなかった、ということです。彼らは他でもないキリストの名により預言をし、悪霊を追い出し、奇蹟まで行ったのです。ですので、自信を持ち、確信を持ち、場合によってはプライドを持って、その日彼らは主に会ったのです。「あの平凡なクリスチャンでさえ、天国へしっかり入っている。それならこんなすごいわざを行った俺は、天国の特等席には入れそうだな」と、そんな期待もあったかもしれません。

しかし彼らはその日、キリストに、『知らない』と言われる。キリストに、『知らない』と言われるなら、天の御国に入ることは無理、永遠の命も得られないでしょう。火の池に投げ込まれるのでしょうか？彼らは何とも恐るべき結末を迎えるわけです。

『主よ、主よ。』と言う者 エレミヤ

ですから彼らは今まで大変な勘違いの中にいたのです。このことから教訓を学び、私たちが彼らと同じような過ちに入らないために何を、気を付けるべきなのでしょう？

この、『主よ、主よ。』と言う人々を理解する鍵は、上記テキストの前の聖書箇所です。ここには以下のように記されています。

〔聖書箇所〕マタイの福音書7:15-20

7:15 にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。

7:16 あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。

7:17 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。

7:18 良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。

7:19 良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。

7:20 こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。

ここには「偽預言者」に関する記述が書かれています。そして彼らは悪い木であり、良い実を結ばせることができないことが書かれています。悪い木、このことばは、『主よ、主よ。』と言う者に対する叱責、「**不法をなす者ども。わたしから離れて行け。**」とのことばに通じます。ですので、彼ら、『主よ、主よ。』と言う者は、偽預言者である可能性があります。そしてこのことを通して我々には不可解だった、『主よ、主よ。』と言う者たちの謎が少し解けてきます。彼らは偽預言者であり、しかもその実が悪い実である、それゆえ主に叱責され、その日、「**あなたがたを全然知らない**」とキリストに言われるのです。

＜偽預言者は自分が偽預言者であることを知らない＞

これらのことを通して分かる教訓はこのことです。偽預言者には一つの特徴があり、それは、彼らは自分が偽預言者である、と全く思っていない、ということです。逆に皆、自分こそ神の

霊により、働きをなしていると思い込んでいるのです。このこと分かりやすい例は、預言者ミカヤの時の出来事です。以下を見てください。

〔聖書箇所〕I 列王記22:19-25

22:19 すると、ミカヤは言った。「それゆえ主のことばを聞きなさい。私は主が御座にすわり、天の万軍がその右左に立っているのを見ました。

22:20 そのとき、主は仰せられました。『だれか、アハブを惑わして、攻め上らせ、ラモテ・ギルアデで倒れさせる者はいないか。』すると、あれこれと答えがありました。

22:21 それからひとりの霊が進み出て、主の前に立ち、『この私が彼を惑わします。』と言いますと、主に彼に『どういふふうにするのか。』と尋ねられました。

22:22 彼は答えました。『私が出て行き、彼のすべての預言者の口で偽りを言う霊となります。』すると、『あなたはきっと惑わすことができよう。出て行って、そのとおりにせよ。』と仰せられました。

22:23 今、ご覧のとおり、主はここにいるあなたのすべての預言者の口に偽りを言う霊を授けられました。主はあなたに下るわざわいを告げられたのです。」

22:24 すると、ケナアナの子ゼデキヤが近寄って来て、ミカヤの頬をなぐりつけて言った。「どのようにして、主の霊が私を離れて行き、おまえに語ったというのか。」

22:25 ミカヤは答えた。「いまに、あなたが奥の間にはいつて身を隠すときに、思い知るであろう。」

この日、イスラエルの王に対して主の名で預言をし、王の気に入ることを語る400人の預言者がいましたが、彼らは皆、神ではない他の霊に惑わされ、だまされていました。

このように、彼らは惑わしの霊の下で預言していたのですが、彼らの誰一人、自分が神ならぬ、惑わしの霊に惑わされて預言していると理解している人はいなかった、のです。逆にそれを指摘したミカヤを殴りつけています。

偽預言者は、決して自分が惑わしの霊に従って預言しているとは思わない、このことをこの箇所から学ぶのです。

『主よ、主よ。』と言う者 エレミヤ

そしてそれは上記、『主よ、主よ。』と言う者たちの間違えにも通じます。彼らはなぜ、その日、キリストに会う日まで自信满满だったのでしょうか？それは彼らが惑わされており、深く惑わされており、つゆほども自分が惑わしの霊の下、神ならぬ霊により預言をしたり、悪霊を追い出したり、奇跡を行っていたとは思っていなかったからなのです。このことを通して偽預言者を惑わす霊の惑わしは非常に強く、深いものであることを知ることができます。

そしてさらにキリストがなぜ彼らに対して、『わたしはあなたがたを全然知らない。』と語ったかも理解できます。彼ら、『主よ、主よ。』と言う者たちは、キリストの霊でも、神の霊でもなく、逆に惑わす悪霊により、預言や悪霊追い出しや奇跡を行っていたのです。ですからキリストはそれらの神の霊とは全く関係ない働きやしるしに対して、『わたしはあなたがたを全然知らない。』とはっきり宣言したのです。

そしてさらに私たちはこの箇所を通して一つ大事な教えを悟る必要があると思います。それは、「キリストの名」を用いて、神のわざを行っても、それは神の霊による働きとはかぎらない、ということです。ミカヤの時の400人の預言者は皆、神の名により預言をしていましたが、しかし実際はその預言は神からのものではなく、惑わしの霊からのものでした。同じように、『主よ、主よ。』と言う者たちの行った預言も悪霊追い出しも、そして奇跡も皆、キリストの名によって行われたのですが、しかし実際はキリストとは無関係な悪霊によるわざだったので、それで主は彼らに、『わたしはあなたがたを全然知らない。』と言われたのです。

＜世の終わりには多くの偽預言者が起きる＞

さて、このような、『主よ、主よ。』と言う者の誤りは、現在の我々とは無関係ではありません。

なぜなら主は世の終わりに多くの偽預言者が起きることを預言しておられるからです。以下の通りです。

〔聖書箇所〕マタイの福音書24:24

24:24 にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。

終末の時代とは、多くの偽預言者が起きる時代であり、そしてそれは別の表現で言うなら、多くの惑わしの霊、悪霊の働きが許される時代なのです。

＜勘違いの教会、ラオデキヤ＞

終末の日のクリスチャンを惑わすサタンの方法とはどのようなもののでしょうか？それは惑わしの霊を通して、クリスチャンをすばらしい預言の器、悪霊追い出しの器、奇跡の器であると錯覚させることです。そしてまんまと悪霊に従ってわざを行わせ、最終的にはもっとも大事なものを、彼らの永遠の命を奪う、という方法なのです。エデンの園でエバをだました時のサタンは彼女にとってうまい話、得する話、儲かる話を持ってきました。この実を食べれば神のようになれる、また、決して死なないと語り、思い込ませたのです。そして欲にかられ、その話にだまされたエバは結果として永遠の命を失ったのです。彼女は命の木から追放されました。終末の日のサタンのクリスチャンへの惑わしも同じようなものです。すごい癒しやすごい神のわざが起きた、神に触れた、聖書の生きた理解ができるようになった、クリスチャンとしてレベルが上がった、などと欲にかられているうちにサタンのしるしに惑わされ、結果永遠の命を失うようになるのです。

『主よ、主よ。』と言う者 エレミヤ

終末の日のクリスチャンへのわなは、悪霊による賜物の道へ引きずり込むことです。その惑わされた教会の姿はラオデキヤの教会を通して学べると思えます。

ラオデキヤの特徴は、「**自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もない**」と自称していることです。しかしそれは勘違いであり、神の前にはそうではない、ということです。以下のみことばの通りです。

〔聖書箇所〕ヨハネの黙示録3:17

3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

ラオデキヤの教会の特徴は、自分は富んでいる教会、豊かになった教会であると思込んでいることです。預言やら、悪霊追い出しやら、奇跡やらの賜物で富み、聖書知識的にも何も乏しいことはない、と言うようになるのでしょう。そしてこのラオデキヤの勘違いは、前述の、『**主よ、主よ。**』と言う者たちの勘違いに通じることを知しましょう。この教会には、たしかにしるしや不思議や賜物はあるのですが、しかしそれはキリストからのものではないのです。その証拠にキリストはこの教会、神の家から追い出されているからです。

〔聖書箇所〕ヨハネの黙示録3:20

3:20 見よ。わたしは、戸の外に立ってたたか。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいて、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

ラオデキヤは異常な教会であり、キリストを追い出し、キリストの霊である聖霊を追い出し、その代わりにキリスト以外の霊、悪霊による賜物に満ち、富んでいる教会なのです。人の目の前にはすばらしい賜物の教会に見えるでしょうが、神の前には滅びの寸前にいるのです。

上記、「**実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。**」とは暗示的なことばです。「みじめ」との原語は、以下でも使われています。

〔聖書箇所〕ローマ人への手紙7:24

7:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

ここではパウロは自分が罪から解放されないことを嘆いて「みじめ」ということばを使っています。ですので、ラオデキヤの教会も、自分は富んでいる、と言いながら、そのじつ、神の前には罪の真っ只中にあるものであり、結果として天の御国に入れない可能性があるのです。そしてそれはキリストから、「**わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。**」と拒絶された、『**主よ、主よ。**』と言う者たちに通じるのです。

<神の霊によらないしるしや不思議>

さて、これらの事柄は我々と無縁ではありません。なぜなら聖書には決して起きない絵空事が書かれているのではなく、現実起きる危険が前もって書かれているからです。そのような目で見ると、巧妙な霊による惑わしのしるしや奇跡が今のキリスト教会を席卷していることに我々は気付きます。私たちはこれらのしるしや不思議を無条件に信じる、受入れるのではなく、吟味が必要です。主は偽預言者の働きに関してその実で見分けるように、と言われました。

〔聖書箇所〕マタイの福音書7:18-20

**7:18 良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。
7:19 良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。
7:20 こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。**

『主よ、主よ。』と言う者 エレミヤ

そして、現在のリバイバル運動の器には、多くの「悪い実」を結ぶ木、人物が多いことを知りましょう。多くのスキャンダル事件、刑事事件さえ起きています。彼らはたしかに富んでおり、また何か奇跡的なことも行えるのかもしれませんが、しかしそれは果たして神からのものなのでしょうか？

このような偽預言者の後に着いて行き、やれトランスフォーメーションだ、神のすばらしいわざだと浮かれていても、行き着く所は、『主よ、主よ。』と言いながら、キリストに、「知らない」と言われてしまわないでしょうか？永遠の命を失わないでしょうか？吟味が必要です。

彼らは罪を犯しており、偽預言者の実に満ちており、彼らに従って行って我々が果たして天の御国に入れるかどうかは不明です。なぜなら主は、「**良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。**」と言われたからです。

今は多くの惑わしの霊の働きが許されている時代であり、その結果キリスト教会のあちこちで、「突然神が私に臨んだ」「すごい賜物が神により与えられた」「神から預言の霊が与えられた」などと言う人が多く現れている時代です。それが本当に神からの霊なら良いのですが、そうでないときは前述の、『主よ、主よ。』と言う者のように最後まで悪霊に惑わされ、結果永遠の命を失う可能性があるのです。このことを正しくとらえましょう。

再度言います。主はこのように言われました。

「その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言を……。』」

その日、惑わしの霊を神からの霊だと思い込み、その結果永遠の命を失う人が大変多いことを主は語っているのです。この主の警告を決して軽視すべきではありません。終末の日の惑わしの霊の偽りは巧妙であり、多くのクリスチャンはそれをすっかり信じ込み、永遠の命を失うのです。このことを知りましょう。

<悪霊の洪水に取られる>

主は終末の日に関して、それはノアの時のようである、と語りました。以下の通りです。

[聖書箇所]マタイの福音書24:38-41

24:38 洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついでにしていた。

24:39 そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。

24:40 そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。

24:41 ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。

このことばはたとえであり、終末の日に霊の洪水、悪霊の洪水がキリスト教会に起きることを預言しているのです。そしてその悪霊の洪水に、「ひとりを取られ、ひとりが残される」ことを預言したのです。今は洪水の時であり、多くのクリスチャンが霊の惑わしの洪水に飲み込まれています。ですので、突然神が臨んだ、すごい賜物が現れた、と喜んでいる人々は、じつは悪霊の洪水に取られており、サタンの惑わしに魅入られている可能性があります。悪い木が良い実を結ぶことはないとのことです。いずれその霊による混乱は、自分にも周りにも明らかになるでしょう。頑なになるべきではありません。逆に謙虚になり、聖霊を崇め、惑わしからの解放を求めましょう。



金粉のリバイバル、それは神からのものか？

安息日

クリスチャン生活を送るようになり大分時が経ち、最近になって私なりに悟りを得たことがありますので証をしたいと思います。テーマに掲げましたが、「安息日」の意味合いに関して、です。かつてはあまり「安息日」ということをほとんど意識したことが無かったのですが、ただ洗礼を受けて間もない時に、今はこんな風に日曜日に礼拝に行っているけれど、もし何かの都合で日曜日に礼拝に行けなくなったらどうしよう？それに元々仕事とか家庭の事情で日曜日にどうしても教会に行けない人はどうするんだろう？そういう人は神さまにクリスチャンとして認められないのだろうか？あるいは救われないのだろうか？という疑問を持ったことがありました。つまり私の心の中で、「安息日」＝「日曜日」だと思っていたのでした。なので極端な言い方をすると、日曜日に礼拝に参加できない人は安息日を破っているのでは？なんていう考えが無くもありませんでした。でも、ここ数年前から、それは自分の勘違いが大いにあるのでは？と思うようになり、「安息日」の本来の意味合いについて少しずつ折り求めていくようになりました。

ところで今私が通っているレムナントキリスト教会では、聖書のことばを文字通り理解することにプラスして、裏の意味合い、すなわちたとえの意味合いをも理解しています。そして「安息日」に関して、多少なりともたとえの意味合いが使われていて、そのことを理解することによって本来の意味合いを少しずつ悟るようになっていきました。せっかくですので、聖書箇所を見てみましょう。

〔聖書箇所〕レビ記23:3

23:3 六日間は仕事をしてもよい。しかし七日目は全き休みの安息、聖なる会合の日である。あなたがたは、いっさいの仕事をしてはならない。この日はあなたがたがどこに住んでいても主の安息日である。

ここで「**七日目**」ということばがあり、そのあとに「**安息**」ということばが書かれています。こ

のことを文字通りに理解するなら、一週間の七日目＝日曜日、ということになります。たしかにそれも正しいのでしょう。しかしそれに続いて、「**いっさいの仕事をしてはならない**」とあります。このことばを以前はそのまま文字通りにとらえていました。日曜出勤は絶対にダメだと。そればかりではなく、家事もしてはならないと思っていました。でも、それと同時に、果たして神さまは本当にそのように語っているのか？という疑問もありました。たしかに表の意味合いとしては、一週間の七日目、ということとは言えます。そしてそれに関して、あるみことばを思い浮かべました。第二ペテロの手紙のことばです。そこには、「**しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。**」(第二ペテロの手紙3章8節)ということが書かれています。それを読んだ時に、「**一日**」を「**千年**」と言っていることに、思わず目が留まりました。このことから「七日目」とは、神さまが天地を創造されてから 6,000年を経て、7,000年目のことを言われているということを理解しました。簡単に説明すると、BCの初めから終わりが4,000年間、ADから数えると2,000年以上の時が流れているので、それらを合算すると、今がまさしく7,000年目、すなわち「七日目」ということになります。さらに「**安息日**」と「**仕事**」との関わりについてのみことばをいくつか見てみたいと思います。

参照 出エジプト記31:15,民数記19:12

31:15 六日間は仕事をしてもよい。しかし、七日目は、主の聖なる全き休みの安息日である。安息の日に仕事をする者は、だれでも必ず殺されなければならない。

19:12 その者は三日目と七日目に、汚れをきよめる水で罪の身をきよめ、きよくならなければならない。三日目と七日目に罪の身をきよめないなら、きよくなることはできない。

安息日

上記にて、「安息日に仕事をする者は、だれでも必ず殺さなければならない」とあります。これもまた、「ええっ?!日曜日に働いたら殺されてしまうの?料理をしたり、掃除をしたりするのもダメなの?一家のご主人や主婦の人は大変だ!」と思ったこともありましたが、でも、のちになってそれは「たとえ」で書かれていることを理解しました。そのきっかけとなったのが民数記のみことばです。「三日目」はADから数えて3,000年目になるので、つまり「七日目」と同じことを言われています。それは今の時代のことです。そして「七日目」すなわち「安息日」にしなければならないことについて書かれています。「**汚れをきよめる水で罪の身をきよめる**」ことです。「罪は毎日悔い改めているから大丈夫」と言われるかもしれませんが、もちろんそれも大事なことです。しかしここで言われている「罪」とは、単に個人の罪のことだけではなく、キリスト教会の教理のことをも言われていると思います。どういうことか?と言うと、「七日目」において、みことばへの冒涇が起きるということを、12節のみことばでは暗示しているのです。いくつかの例を挙げるなら、地獄は無いとかクリスチャンは艱難には会わずに携挙されるとか、煉獄がある、セカンドチャンスがある、などの教えです。こういった教理は、「**六日間は仕事してもよい**」とあるように、六日目までは、ほぼ語られていなかったのです。しかし七日目になると、六日目までの正統な教理がおかしな教理に変質しますよ!ゆえに汚れをきよめる水(聖霊のたとえ)で罪をきよめましょう!ということ言われているのです。それゆえに六日目まで伝承された正しい教理を曲げる者、すなわちそれ以外の教理を語る者、そう、みことばに書かれているように、仕事をする者は、「**だれでも必ず殺される**」ということが言われているのです。これってどうでしょう?天の御国を受け継ぐでしょうか?いや、恐らく無理だと思います。

色々説明が長くなりましたが、「安息日」

とは、ひとつは文字通り「日曜日」ということもあるかもしれませんが、しかし聖書のみことばのたとえの意味合いを通して、それはまさしく今の終末の時代のことを言われている、ということ遅ればせながら悟ることができました。そして「安息日」とは、みことばの冒涇の時である、ということにおいても、現実のあらゆる状況を通して、まさにその通りだということについても理解できました。それこそ世の中にすっかり広まってしまったダヴィンチコードもそのひとつだと思います。キリストはマグダラのマリヤと結婚して子どもがいた、なんてことは聖書のどこを探しても見当たらないのですが、そのようなことが書かれているそうです。それって、まさに聖書のみことばへの冒涇だと思います。でも、そのようなものを鵜呑みにしていたり、はたまたそんなことを広げてしまったりしたら、死後ろくでもないことになってしまうので気を付けていきたいと思います。

今回は長年にわたって疑問に思っていた「安息日」のことを私なりに氷解した点について述べさせていただきます。そして神さまが私の小さな疑問にこたえてくださったことに心から感謝して証とさせていただきます。いつも大事なことを教えてくださるイエスさまの御名が益々崇められますように。主に栄光を帰します。



安息日をきよく保つ

お知らせコーナー

●エレミヤの新刊「天皇家は万世一系のダビデ王朝の末裔である！」



定価:¥1,500+消費税

注文を御希望の方は、以下へご連絡下さい。

警告の角笛出版:

tel:042-364-2327

fax:020-4623-5255

mail:truth216@nifty.com

●レムナントキリスト教会「日曜礼拝」のご案内

曜日/時間:毎週日曜日/午前 10:30-12:30,午後 14:00-16:00

場所:東京都、京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館

(tel:042-360-3311)

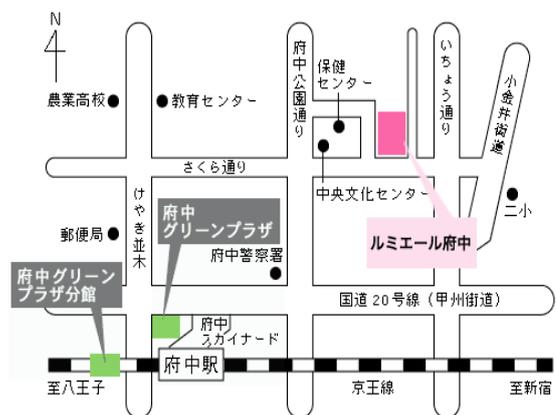
1Fのエレベーター脇の部屋表示板で、

「レムナントキリスト教会」の部屋をご確認ください。

どなたでも来会歓迎、入場無料です。

礼拝場所のURL:

http://www.fuchu-cpf.or.jp/green/access/map_02.html



●第40回黙示録セミナー by エレミヤ

黙示録、ダニエル書など終末に関するトピックを解説するセミナーです。

北海道から、広島から熱心なクリスチャンが参加しています。

場所:府中グリーンプラザ本館第5会議室(7F)上記地図を参照。

日時:2015年5月10日(日) 18:00-20:30

費用:入場無料、但しテキスト代 1,000 円(当日徴収)

定員:20名(先着申込順。満員次第締め切り)

主催:レムナントキリスト教会 (tel:042-364-2327)

申し込み:メールもしくはfaxで、「名前、住所」を記載の上、「セミナー参加希望」とお申し込みください。

fax:020-4623-5255,mail:truth216@nifty.com